

# 職場体験 感想文コンクール2024

タイトル	特別な仕事	事務局	502
学校名	酒田市立第二中学校	氏名	渡部 寧祐

九月二十六日、私は、酒田の市民に愛されるパン屋、ブランジェリー木村屋に、職場体験に行きました。パン屋は、私が小さいころにあがれていた特別な仕事でした。小さい頃かぜをひいて、病院に入院した時、病院の中にあたパン屋さんののにおりにいせされたからです。パンのにおりにつつまれて、人を笑顔にする素敵なお仕事というイメージが、小さい頃からありました。今の将来の夢は、もう変わってしまいましたが、あの時あがれていた仕事がとても好きで、知ってみたいとブランジェリー木村屋を職場体験でえらびました。

木村屋のうららのとびらをノックすると、店の人たちは笑顔でむかえ入れてくれました。一人一人に「ようこそおねがいします」と、優しくながら店内へ入りました。うららから入るのは、はじめてでした。いつもパンがたかさんお目所にお客さんとして入るので、まだパンがあまりなるといわれるのは、不思議な感じがしました。けれど店のデコイフや店の人の表情はとておたたか、いい店でした。私は店のつごうで一日だけの体験となりましたが、その一日で気づけたことや、楽しいと感じた思い出がたかさんあります。その中でも大きく二つが心に残っています。一つ目は、店内の雰囲気についてです。特に大きな仕事というほどの作業でなくとも、細かい所まで見て仕事を探し、せいぜいはい取り組む人たちの姿は、とておか、さすがです。私にパンのつごうを教えてくださいました。いつも細部までこだわっているということもすぐに分かりました。私は、なぜお客さんがあまり気にしないような、つごう紙の内側やパンの置き方に気をつけるのかときも聞きましたが、自分のかみけりやけんが、お店をよりよくしていくのがやりがいだということを知り、お客さんだけのためではなく、店のためや、店ではたらく人たちのために仕事をするすばらしさに気づきました。

もう一つは、「仕事」と「お手伝い」のちがいに気づけたことです。お給料をもらたわけにはありませんし、自分で作たパンを知らない人に食べてもらたわけでもありませんが、店を出ていく人が笑顔になるだけで、知らない人であるのにも関わらず、うれしくなりました。パンの配送の仕事も、紙でパンをつまんでシールをはる仕事も、細かい物に思えますが、風呂そうじや皿あらいなどの手伝いでもなく、顔も知らないたかのために、店のために、自分の成長のためにおる「仕事」でした。あたりまえのことですが、自分が仕事をするということが

これまで家の家事とかが多いということに気がつくことができました。

たまた半日のかんたんな手作業でも、こんなにたっせいかんがあることを知れて、ブランジェリー木村屋に行きたことに、心からよかったです。

パン屋などの人を喜ばせる仕事は、とてもたっせんあり、その一コマにあがれた人がいて、その仕事に助けられた人がいます。今勉強をするのは、社会に出て、大きな壁に当たった時に、あきらめず努力をつづける練習であると思います。今という時間を大切に、大人になる準備をしていこうと思います。社会に出るといことが、知らない人のためにも、自分でできることを自分で見つけたし、努力して解決することができるようになるものだと感じました。

これに気がかせてくれたブランジェリー木村屋に感謝して、今できる勉強や人との関わり方を学び、せいいっぱい頑張りますとしたいと思います。

いつまでもパン屋は私の中で特別な仕事です。